盆踊り唄「松坂節」の採譜と分析

Record in a musical note and analysis of Bon Dance song "Matuzaka Bushi"

茨　木　金　吾
Kingo Ibaraki

はじめに

前稿（近畿大学豊岡短期大学論集第５号）において、豊岡の二大盆踊り唄の一つである「べろべろ節」を採譜し、分析した結果、古典邦楽の“呂音階”の唄が、近代に入って和太鼓、締太鼓、鉦といった打楽器や三味線といった弦楽器を加えることによって、近代邦楽の音階である陽旋法“ヨナ抜き長音階”の唄として作り直されたものではなかろうか[1]という仮説を得ることができた。また、現在まで慣れ親しまれ、伝えられてきた要因として歌詞面での効果が挙げられ、“べろや　べろべろや　べろべろや　べろやべろや　べろべろや　またべろや”という言葉の繰り返しが、耳から入ったとたん意味のある言葉とは違う形で効果をもたらしたのではなかろうか[1]と推察するに至った。

本稿ではもう一方の盆踊り唄である「松坂節」を採譜し、分析することによって、豊岡で唄われ踊られている盆踊り唄のさらなる傾向を探ることとした。

調査方法

○調査楽曲：豊岡盆踊り唄「松坂節」

○調査音源：カセットテープよりPCに取り込んだ音楽ファイル“MATUZAKA.WAV”

○調査方法：

［採譜］　調査対象となる豊岡盆踊り唄「松坂節」も「べろべろ節」と同様、古いものであり、その録音状態は極めて悪く、ダビングにダビングを重ねて音が劣化したものが通常使用されており、かなりノイズの多いものである。そのノイズを減らすことを目的にPCに取り込み、ノイズカットを試みたが、除去効果はあまり得られず、細部にいたるまで採譜するにいたらなかった。

［分析］　採譜した楽曲を、PCソフト　カワイ・スコアメーカーFXを使用し、移調機能を使用して調号無し譜表に置き換え、その楽曲の構成のされ方を調べた。

また調査する中で、文献として使用した豊岡民話「耳ぶくろ」より神美地区に存在するもう一つの「松坂」を知り、その文献より入手した譜例を「松坂節」と同様に移調し、その楽曲の構成のされ方

も併せて分析した。

調査結果

今回の調査によって採譜した「松坂節」が、譜例１－１であり、PC により分析し易く調号無しに移調したものが譜例１－２である。また、調査譜例として入手できた神美地区の「松坂」が譜例２－１であり、「松坂節」同様に移調したものが譜例２－２である。

採譜した楽曲(譜例１－１、譜例１－２)及び入手した楽曲(譜例２－１、譜例２－２)を分析する際、前稿と同様に民謡としてのリズムの分析に関しては民謡調査研究の第一人者である小泉文夫の民謡のリズムの分類[3)]にそって捉えることとした。

１.「松坂節」について

小泉は民謡のリズムについて無拍でメリスマティック(歌詞の一字に多音があてられる)な「追分様式」(譜例３－１)と、「拍」をもつシラビック(歌詞の一字に一音があたる)な「八木節様式」(譜例３－２)に分類しており、現在の日本音楽全体のリズムの分類にはこれが適用されている。

この小泉のいうリズムの分類で「松坂節」を捉えると、「拍」を持っていることからあきらかにシラビック様式である「八木節様式」によって、リズムは構成されていることがわかる。

さらに鐘、締太鼓、樽太鼓で構成されている打楽器群のリズムを見てみると律動の中核をなす低音のリズムである樽太鼓がシンコペーション(八分音符と四分音符の組み合わせ)を主に構成されており、そのリズムも唄に入ってからは使用されておらず、鐘と締太鼓による十六分音符を使っての掛け合いによって打楽器群のリズムが構成されていることが分かる。それがこの楽曲の大きな特徴といえる。

また、唄パートについても付点のリズム(付点八分音符と十六分音符の組み合わせ)を多用していることから近代楽曲で躍動感を持たせるために使用されているスキップと同様のリズムが使われていることも見て取れる。

次に構成されている音階を譜例３－３の日本の音楽理論にあてはめてみると「松坂節」は複雑な構成のされ方をしていることが分かる。

前奏部の３小節が陰旋法で作られ、４小節目に陽旋法へと変化し、その後、ハヤシ言葉の部分から小泉の分類した四種の基本テトラコルドである律のテトラコルドが用いられ、律音階を構成していることが分かる。このことはそれぞれの音階の構成のされ方を見れば分かることであり、その構成のされ方は前奏部３小節はＦ音とＢ音が使われておらず、４小節目はＥ音が半音下げられ、陽旋法の特徴であるＥ♭が使用されている。さらにハヤシ言葉に入り、律音階の特徴であるＥ音の使用がなされず、最終小節の唄の音階音でＤ音、尺八の音階音でＧ音を使っていることから繰り返しであるハヤシ言葉の律音階に繋げる効果と前奏部の陰旋法に繋げる手法をとっており、音階の流れが三種に変化していることが譜表上からも曲想面からも感じとることが出来る。

２.「松坂」について

この楽曲は豊岡で唄い踊られている通常「松坂」といわれる「松坂節」を調査中に、調査対象文献である豊岡民話「耳ぶくろ」の中で発見できた楽曲であり、一度も耳にしたことのない楽曲であった。古くは神美(かみよし)地区で唄い踊られた楽曲とのことであり、神美村誌の中で伝えられてきたものであり、旋律譜のみの取得であり、テンポ、伴奏等、旋律以外の構成が全て不明である。

従って分析出来たのは旋律のみであり、旋律譜を調号無しの譜面に移調し、分析をおこなった結果、次のことが分かった。

Ｂ音を除く全ての自然音が使用されており、旋律内の音と音との流れは全て全音で構成されており、全音音階の構成になっているのは明らかなのだが、日本音階でいう近代邦楽の音階である“ヨナ抜き長音階”の作曲手法はとられておらず、第四音であるＦ音が部分的に使用されている。

このことから「松坂」は古典邦楽の音階である“呂音階”を基に近代邦楽の音階である“ヨナ抜き長音階”で作られたものであるとは断言できず、一つの推察として五音音階である呂旋法と律音階が相合わさった形で成り立ったものであり、日本音階の一つの特徴である全音音階の形は崩さず、あるパートはＦ音を使用し、またある部分ではＥ音を使用し、音と音との間の全音を維持しながら楽曲を構成していったのではなかろうかとみることができる。

３．歌詞面から見た「松坂節」「松坂」について

「松坂節」は「べろべろ節」のように「べろ（べーろ)」というハヤシ言葉（句）を繰り返すだけで一歌詞（１番）をなし、七七七五調にまとめられているというような歌詞面での特徴はなく、七五調の語り物として唄われている。

<u>豊岡の「松坂節」</u>[2)]

豊かなりける豊岡の町をめぐりて流れゆく、
円山川は上つ代に、但馬の水を海原え、
放ち玉ひし神々の、霊験業(わざ）御恵みを
殖ゆるばかりの嬉しさは、誰しもそれと三開きの
富士の山程幸福を積んで渡るや京口の
橋を渡りて新町の、桜見よなら旭道、
小尾崎こえて豊田町、万(よろず)宵田の橋こえて、
返すたもとの涼しさは、何時もこゝらの立野橋、
元町すぎて円山の新地に並ぶ掛けあんど、
堀川橋の帰り舟、眺めゆかしき花園に、
柳行李の久保町を、いつしか過ぎて色町の

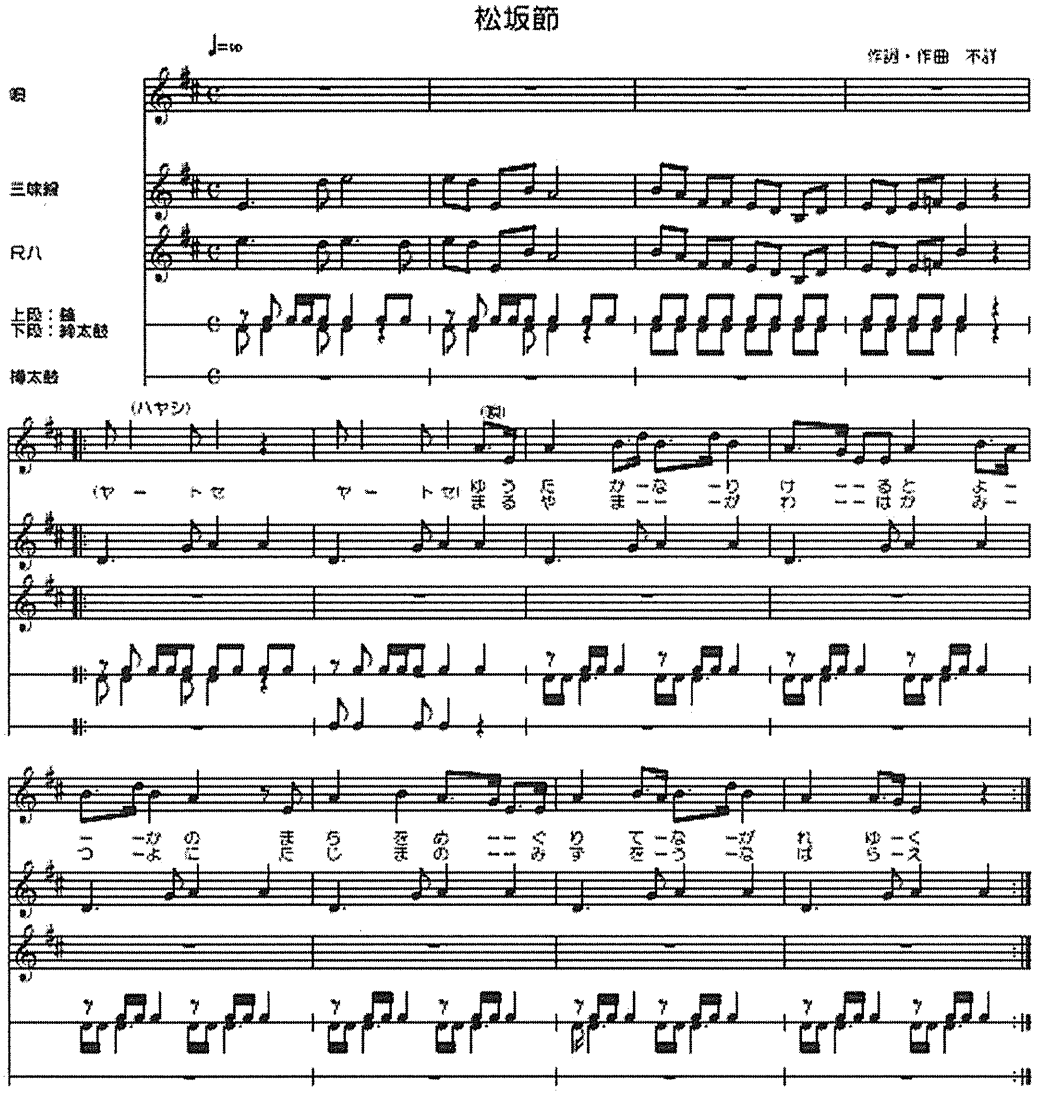
主のよわいを亀山と、お稲荷様の金山へ、

本懐遂げし義士の墓、名は末代と国々に、

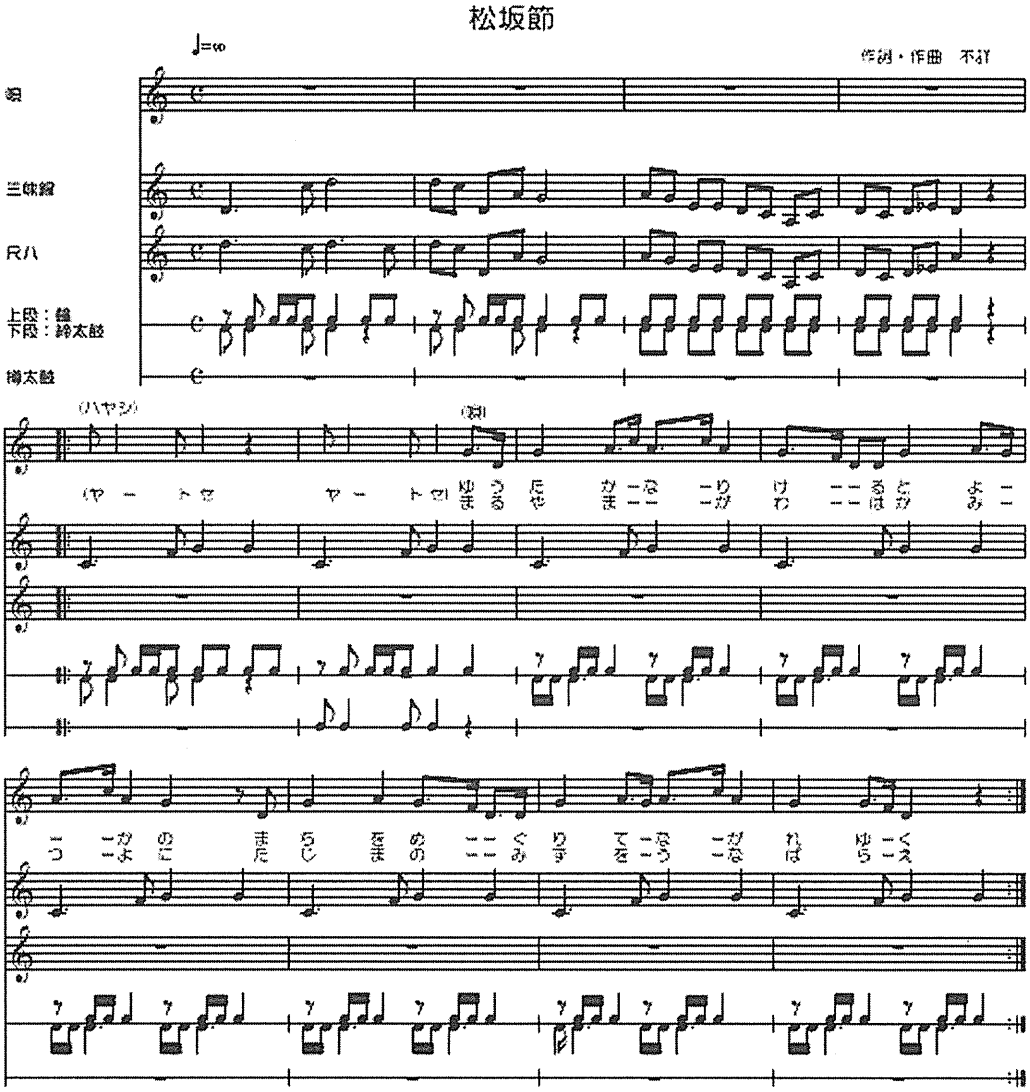
柳細工と諸共に、広まりゆくぞ芽出度けれ

また、「松坂節」は北陸から九州地方まで広く分布する盆踊り唄として知られており、土地によってメロディーが変わり、歌詞も別々である。

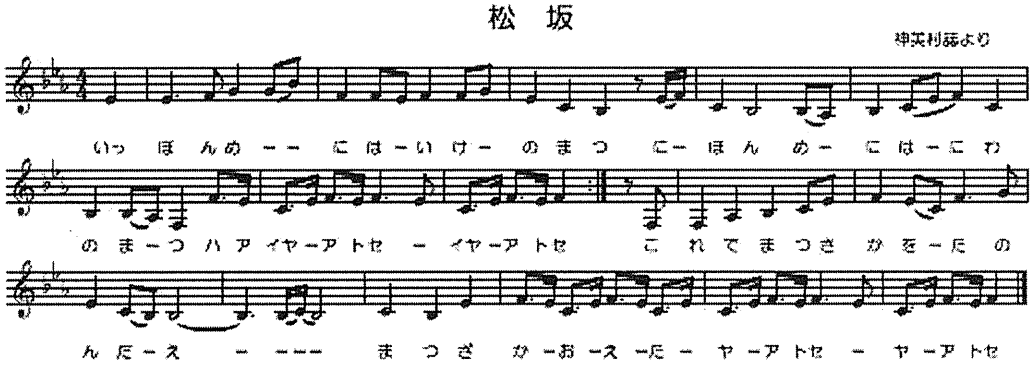
「松坂」についても歌詞内容が断片的であり、はっきりとしないが「松坂節」と同様に七五調の語り物として唄われてきたものであることが推察できる。



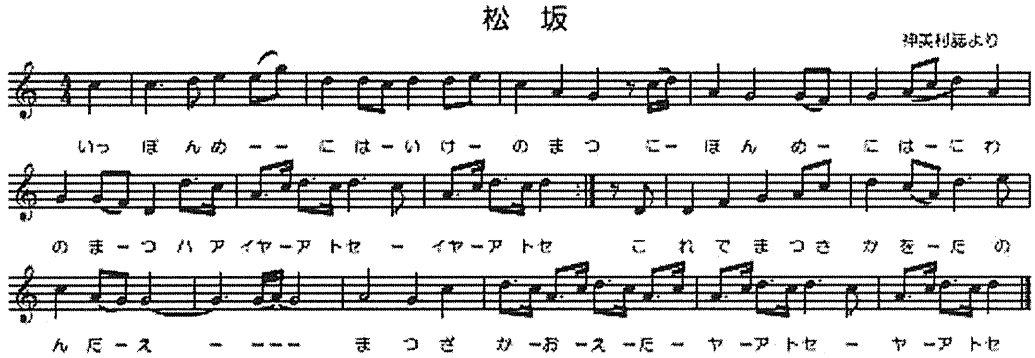
譜例１－１　採譜「松坂節」


松坂節
♩=∞
作詞・作曲　不詳
唄
三味線
R八
上段：鼓
下段：鈴太鼓
博太鼓
(ハヤシ)
(ヤー　トセ　ヤー　トセ)
ゆうたや　かーなーりけーるとよこ
まーこーがわーはかみこ
つーかのこまちしをまめのこーくりてをこうこなればゆらこーえ

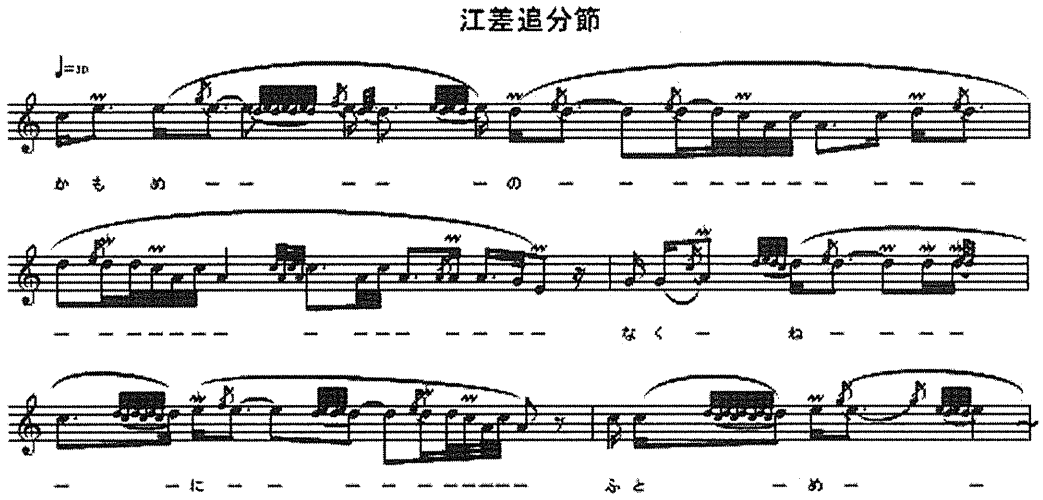
譜例１－２　移調「松坂節」

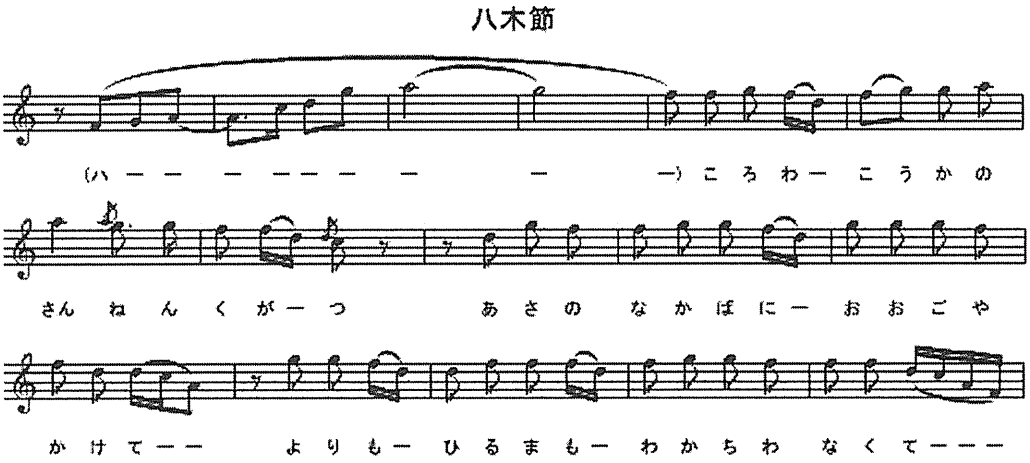


譜例２－１　神美村誌に譜例として残る「松坂」[2)]

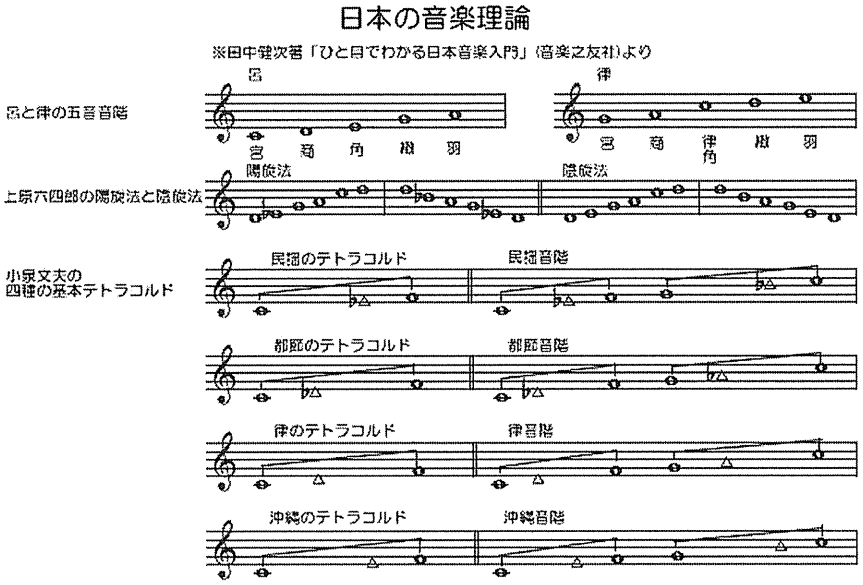


譜例２－２　移調「松坂」


江差追分節
かも　め　ー　ー　ー　ー　ー　の　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　



譜例３－２　シラビック様式の典型である八木節様式の一例 [3)]



譜例３－３　日本の音楽理論 [3)]

調査文献とした豊岡民話「耳ぶくろ」の中に豊岡の盆に関する記述がなされている。それは松田邦夫氏が工藤老僧から聞いた話として記されており、次の通りである。

『明治初期の町の盆は、よその町に比べて淋しかった。そこで何とかしてにぎやかな盆にしようとした話を一つ。

久保町の自性院住職工藤禅智師の話「裏町筋のお寺さんたちが相談して、盆踊りを奨励し、盆をにぎやかにしました。先ず最初は子供達に鐘をたたかせ、神仏の家々を回らせました。そうして、その家の前で神仏のくせをまねたり、いろいろしたところ、たいそう人気が出て墓参り客が多くなり、やがて墓参りに来た大人達もこれに加わり出しました。おかげで、裏通りは次第に踊り場になって、盆はにぎわいました。ところが盛んになるにつれ、踊り子衆があふれて、表通りまで出て踊るようになりました。しまいには始めから表町で踊るようになり、踊り子衆は大きな輪が作れると大喜び、朝まで踊り明かすようになってしまいました。

盆は二日の休みでしたが、新調の下駄（どうじま）の歯が全部すり減る程の盆踊りになったのです。」と。※註．明治初期の盆が淋しかったというのは、明治五年まで宵田橋が開放されなかったので、上三町の墓と寺はこちらの方に無かったからでもある。』[2)]

次に「べろべろ節」や「松坂節」のような鳴り物入りのハヤシで構成された楽曲がいつの時代から存在したものであるのかを記したものがあり、それは「上の踊りと下の踊り」の項に次のように記されている。

『豊岡町の生い立ち話の中で、上と中と下の三つの豊岡があったと話したが、盆踊りにもそれがあって、手ぶりや節にも多少の違いがあったらしい。鳴りの型式は移動型で場所を移し、上から下にと流した。鳴り物入りのハヤシは震災後有楽館バンドが創作したもので大正時代は全くなかった。』[2)]

これらの記述から分かるように、現存している盆踊りの音源は鳴り物入りのハヤシで創作されたものであり、明治、大正といった時代に唄われ踊られた楽曲ではなく、おそらく大正十四年の北但大震災の後、昭和に入ってから鳴り物入りのハヤシとして作られ、伝えられていったものであろうことが推察できる。あくまでもこれは推察の域であって、明治、大正に盆踊り唄として使われた楽曲を入手する必要があり、現存する楽曲と比較分析する必要があろう。

現在では、その楽曲の存在を知る高齢者も少なく、入手することがかなり難しいと思われるが、豊岡の盆踊り唄の傾向を探る上では、必要とされる手順である。

おわりに

本稿は、「松坂節」を構築している構成音を採譜し、その採譜したものを移調し、その楽曲を分析することによって、豊岡の二大盆踊り唄である「松坂節」の楽曲構成から豊岡の盆踊り唄が現在まで慣れ親しまれ、伝えられてきた要因を探ったものである。

その分析によって、得られたものは次の通りである。

①民謡としてのリズムは、前稿の「べろべろ節」と同様に、八木節に代表されるシラビック様式(歌詞の一字に一音があたるもの)で構成されている。

②鐘、締太鼓、樽太鼓で構成されている打楽器群のリズムを見てみると律動の中核をなす低音のリ

ズムである樽太鼓がシンコペーション(八分音符と四分音符の組み合わせ)を主に構成されており、そのリズムも唄に入ってからは使用されておらず、鐘と締太鼓による十六分音符を使っての掛け合いによって打楽器群のリズムが構成されていることが分かる。それがこの楽曲の大きな特徴といえる。

③唄パートについても付点のリズム(付点八分音符と十六分音符の組み合わせ)を多用していることから近代楽曲で躍動感を持たせるために使用されているスキップと同様の効果が出ている。

④構成されている音階をみると「松坂節」は複雑な構成のされ方をしていることが分かる。前奏部の３小節が陰旋法で作られ、４小節目に陽旋法へと変化し、その後、ハヤシ言葉の部分から小泉文夫の分類した四種の基本テトラコルドである律のテトラコルドが用いられ、律音階を構成していることが分かる。このことはそれぞれの音階の構成のされ方を見れば分かることであり、その構成のされ方は前奏部３小節はＦ音とＢ音が使われておらず、４小節目はＥ音が半音下げられ、陽旋法の特徴であるＥ♭が使用されている。さらにハヤシ言葉に入り、律音階の特徴であるＥ音の使用がなされず、最終小節の唄の音階音でＤ音、尺八の音階音でＧ音を使っていることから繰り返しであるハヤシ言葉の律音階に繋げる効果と前奏部の陰旋法に繋げる手法をとっており、音階の流れが三種に変化していることが譜表上からも曲想面からも感じとることができる。

⑤豊岡の神美地区でのみ唄い踊られているもう一つの「松坂」は古典邦楽の音階である“呂音階”を基に近代邦楽の音階である“ヨナ抜き長音階”で作られたものであるとは断言できず、一つの推察として五音音階である呂旋法と律音階が相合わさった形で成り立ったものであり、日本音階の一つの特徴である全音音階の形は崩さず、あるパートはＦ音を使用し、またある部分ではＥ音を使用し、音と音との間の全音を維持しながら楽曲を構成していったのではなかろうかとみることができる。

⑥歌詞面から見た「松坂節」「松坂」については、前稿の「べろべろ節」のように「べろ（べーろ）」というハヤシ言葉（句）を繰り返すだけで一歌詞（１番）をなし、七七七五調にまとめられているというような歌詞面での特徴はなく、七五調の語り物として唄われている。

これら６項目の分析結果が得られたものの、前稿の「べろべろ節」のように歌詞面から来る効果(“べろや　べろべろや　べろべろや　べろやべろや　べろべろや　またべろや”という言葉の繰り返しが、耳から入ったとたん意味のある言葉とは違う形で効果をもたらす)[1] はなく、語り物として唄われている一つの民謡の型であり、「べろべろ節」のような強い特異性を持った民謡では無いことが分かった。

このことから強い特異性を持った「べろべろ節」と対をなして唄い踊られてきたことが、現在まで慣れ親しまれ、伝えられてきた要因となったのではなかろうかと推察できる。

次稿では、鳴り物入りハヤシを取り入れた構成で作られた盆踊り唄以前の楽曲に注目し、採譜と分析を試み、豊岡の盆踊り唄の起源を探っていきたい。

最後に、本稿作成にあたって、“たじまうたまつり実行委員会”沖野芳郎氏に資料提供して頂きました。深謝いたします。

引用文献

1)　茨木金吾：盆踊り唄「べろべろ節」の採譜と分析, 1-13, 第 5 号, 近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学, 2008

2)　友田眞一　尾形多藻津　小谷茂夫　大垣三郎　中嶋忠雄　山本兵治　松岡重夫　足立栄一　宮岡房次郎：豊岡民話耳ぶくろ、1-256, 豊岡市老人連合会(兵庫), 1975

3)　田中健次：一目でわかる日本音楽入門、1-175,音楽之友社(東京),2003

参考文献

1)　黒沢隆朝：楽典、11－227,音楽之友社(東京),1966

2)　東洋音楽学会：東洋音楽研究第 20 号、1－192,音楽之友社(東京),1969

3)　早稲田みな子：南カリフォルニアの盆踊り,62-78,第 52 巻 1 号,音楽学、日本音楽学会,2006

4)　高柳蕗子：拾い読みする囃子言葉、「かばん」特別号 特集オノマトペ, 三月書房(東京),1997

5)　服部龍太郎：日本民謡全集、1-320, 角川文庫(東京), 1965

6)　F.T.Piggott,服部龍太郎訳：日本の音楽と楽器、1-253,音楽之友社(東京),1968

7)　吉川英史：日本音楽の歴史、1-469,創元社(大阪),1971

8)　町田嘉章・浅野建二：日本民謡集、1-220, 岩波文庫(東京), 1960

9)　たじまのうたまつり実行委員会：たじまのうた 第 1 集、1-100, たじまのうたまつり実行委員会,2006

10)　たじまのうたまつり実行委員会：たじまのうた 第 3 集、1-100, たじまのうたまつり実行委員会,2009